神奈川新報

※ 発 行 所 ※
横浜市中区港町１-１
電　話（045)543-7190番

横浜市庁舎内
港 記 者 室
電 話(045)671-3325
主 筆　三 村 貞 夫

『ヒロリンＶＳハンバレク奈々』事実無根か真実か
奈々嬢の告白

準備書面

平成21年３月31日

横浜地方裁判所　御　中

１　原告と被告との出会い

（１）平成16年春、原告が勤めていたクラブ「華鈴灯」に被告は友人陳正堂氏ら数人と初めて来た。

その後も、元町の後援者や友人らと一緒に来店していた。

この陳氏は原告と被告との飲食等に同席したり、連絡役をしていたりしていた。

原告は勿論被告が横浜市長であることは知っていたが、原告の担当となり、初めての席で被告から名刺を貰った（甲５号証）。

翌日、原告は被告から貰った名刺に記載されている「Ｅ－ＭＡＩＬ」に来店のお礼のメールを入れた。

すると、被告から原告の携帯電話に「楽しかった」というような内容のメールがあった。

原告は、これに対して、メールを見るのを忘れ、返信しなかったところ、その翌日被告が友人と共に来店、原告に対し「どうしてメールをくれなかったのか」と返信メールをしなかったことを少し責めるように言われた。

これが２回目の来店で、初めて来店してから２日後であった。

その出会いから被告は友人らと来店するようになり、原告がその都度席についていた。

（２）初めての来店から１週間後、深夜被告から近くのバーにいるから会おうと電話がかかり原告が出向くと、前記陳氏がいて一緒に飲食をした。

その後原告と被告とが付き合う様になってから、陳氏が一緒に行動しているときには原告は人目につかないよう、陳氏と付き合っているように見せかけていた。

又、飲食店に入るときには陳氏が先に入り、被告を知っている人が多いかどうかを確かめていた。

陳氏は中華街で中華料理店を経営しているということであったが、被告とは極めて親しい間柄だった。

２原告と被告の性的関係

（１）被告が来店して１ケ月くらいは、呼び出しがあった場合も、お客から次第に友人へと進んだ程度の間であったが、その頃から被告が原告に対し「**好きだ。一緒にいたい**」と特定の関係を求めるような話をするようになった。

準備書面作成、打ち合わせ中のハンバレク奈々と弁護士

原告もお客から遊び程度でその様に言い寄られたことはあり、曖昧に接しており、被告の話にもその程度の対応しかしていなかったが、被告の話は次第に「**付き合いたい**」「**妻とはうまくいっていない。離婚したい**」等々妻との離婚まで言い出し、更に「**インターコンチネンタルホテルに住んでおり、妻とは別居している**」と夫婦間のことまで言うことから、原告も被告の言っていることが遊びや嘘ではない、真剣だと信じるようになり、結婚を前提とするならばと思うようになってきた。

（２）平成16年５月初め頃、初めて出会ってから３～４ケ月くらい経った頃、原告は被告が宿泊していた「**ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル**」に被告から誘われ、初めて肉体関係を持った。その後も、ほぼ１週間に１回、上記ホテルにて待ち合わせをしたり、**店に被告の公用車が迎えに来て同ホテルに行ったりして、関係を持った**。

被告の説明では、同ホテルには、原告と会う部屋とは別に被告の住居部分の部屋もあると言っていた。

二人が関係を持つようになってから、被告はホテル内にあるジムで運動し、身体を鍛えだすようになった。

その後、二人が会った日は元町の**異人のダーツバー**に行くことが多かった。

その他、原告の知り合いの店に行きたいという被告の希望から関内にあった「**ハート＆ソウル**」という店に連れて行ったこともあり、その店のオーナーが被告のことを気づきびっくりしていた。

又、**被告が運転する自家用車**で焼肉を食べに東京に行ったりもしていた。

因みに、被告から原告へのメールは別表１～21記載の通り平成16年５月30日から同年９月８日までしか残っていないが、二人の直接の連絡は携帯電話番号（０９０－７２３２－０２９９）も教えてもらっていたが、殆ど携帯電話のメールでしていた。

３　原告と被告との交際－残存するメールによるもの

（１）平成16年５月30日原告が勤めていた「華鈴灯」のママから、ママの夫（ＩＴ関係の会社を経営しているとのこと）に紹介して欲しいと頼まれ、**石川町にある中華料理店**でコース料理を注文、原告、被告とママ、その夫と４人で会食をした。

その費用はママが出した。

ママの夫が被告に対し「**次、総理大臣になるなら誰がいいですか**」と尋ねると、被告は「**小澤がいい**」と言っていたことがある。

又、会食前、被告は原告と連絡を取りあったり、会ったりしていることを隠すため盛んに言い訳を考えていた。

この会食及びご馳走になったお礼のメールがある（甲６・７号証）。

被告は原告のことを「**真紀**」と本名で表示している。

〈２〉平成16年６月16日原告、被告、前記陳氏それから原告の友人の４人で**東京ドームでのダイエー戦の野球観戦**に行った（甲11号証）。

被告から「**陳が寂しいから一人女の子を連れて来てくれ**」と頼まれ、原告も中々見つけることができず、余り連絡を取っていなかった友人を連れて行った。

席に座ったが、隣にタレントの「**久米 宏**」がいて、被告はびっくりして「何を言われるか分からない」と言い、野球観戦もそこそこに退散しようとしたが、球場関係者に挨拶をされ、そこで原告は**ユニフォーム**を貰った。そのユニフォームは現在もある。

その足で、**神楽坂のフレンチ料理**の店に行き、個室で食事をした。そこは被告の行きつけの店のようで、責任者か経営者か分からないが店の人が挨拶に来ていた。

被告は当時禁煙をしており、原告と陳氏は被告がトイレに席をはずした際にタバコを吸っていた。その**個室にはトイレ**が付いていた記憶がある。

４人でワインを飲んだが陳氏が一番酔っていて運転できないので、被告も飲んではいたが陳氏ほどではないことから**被告が陳氏の車（ＢＭＷだったと思われる）を運転した。**

横浜市港南区日野インターで降り、原告の友人を降ろした。

友人が被告に対しお礼を言おうとした時、被告が握手をしようと右手を出すと友人が被告の右手に左手を添えて握手をしたら、被告は「**偉い。握手は右手でするものだ。左手を添える君は偉い**」と強調していた。

（３）被告からのメールは頻繁に入り、残っているものだけに限定しても上記以外に次のような内容のものがある。原告と被告との関係が親密であること明白である。

①「『嶋耕作プラスマガジン』を見ておいて」（甲８号証）

原告は、このメールを見て被告との関係を知っている友人と共に書店に一緒に見に行った。**この友人は自宅まで被告公用車で送ってもらい**、「市長に送ってもらいビビッタ」。「二人が付き合っていることもビビルヨ」と言っていた。

②「**オレも人間関係がどん底**」（甲９号証）

この人間関係とは**被告の夫婦の間**を指している。

③「エマニエル・ベアールさんと会ったよ」（甲18号証）

これは、平成16年６月16日から20日までの間開催された「第12回フランス映画祭横浜２００４」に出席した被告がフランス代表団長として来日していたエマニエル・ベアール氏と会ったことを原告に知らせたメールである。

④　被告の行動を知らせるものもある。

「**今日は今から青森出張**」「**来週は四国**」（甲23号証）

横浜市長行動記録を見ると被告が青森出張をしていること（甲27号証）、又新聞記事によると（甲28号証）、その夏休みを利用して**子供と共に四国のお遍路**をすることが記載されており、メールの記載を裏づけている。

その他、「テレビ朝日のサンデー・プロジェクト」テレビ出演を知らせるメールには（甲24号証）、**被告の氏名**が唯一残されている。

⑤　平成16年６月15日原告は、**被告から貰ったチケットで数回横浜球場での野球観戦をし、友人とＶＩＰ席で見た。**

被告からのメールに「**見事にベイスターズを勝たせた**」とあるのは（甲19号証）、原告が観戦すると必ず勝つことから、このように書いたのである。

４　交際についての噂

（１）平成16年暮れ頃から、原告と被告とが付き合っているという噂が流れた。

後日判明したことによると、これは、被告が堂々と入り口から、しかも頻繁に原告が勤めている店に出入りするのをある右翼団体の関係者が何度も目撃していて、その関係者は「横浜から日本を変えるという人が何故『華鈴灯』に頻繁に行くのですか」と、市役所、市会議員に文書を流したことから一気に広まった。

（２）被告は、この噂を消すのに必死で、当初は「**一緒に頑張ろう**」と励ますようなこともあったが、ある時元町の後援者と来ていた時に、この話題に触れ、当日偶々白と黒のドレスを着ていた被告の服装に引っ掛け、「白黒はっきりさせよう」「俺達は何にも無いよ。こんな**噂が出るくらいなら関係持ちますよ**。ソウだよね」と同意を求められた。

原告も客商売であり、担当しているお客の手前、特定の客と交際していることが噂となることは望ましくはない。

しかし、原告としては被告とは「**結婚を前提としたお付き合い**」をしているのであって、遊びではない。

それなのにどうしてここまで言うのかと不思議に思い、辛い思いであった。

せめて友達という程度の表現にして欲しかったという思いであった。

（３）平成17年に入ってから原告は嫌がらせの電話や、客からからかわれたり、自宅のポストのものが無くなったり、うわさが原因でストレスがたまり、体調がおかしくなりだした。

被告との連絡が次第にとりにくくなり、陳氏に相談すると、「警察に行け」と他人事の様にそっけなく言うだけであった。それでも、陳氏は店には来て、直接連絡がとりにくくなった被告との連絡役のようなことをしていた。

（４）しかし、原告は被告に対する不信感よりも信頼する気持ちが強かったが、平成17年暮れ頃から被告とは直接会えなくなっていたが、原告は噂に対しても被告のことをかばっていたものの、被告は原告のみに押し付け、更には噂を流したのが原告であるような話が流れてくるようにもなった。

平成18年２月入院した際にも何のお見舞いも無かった。その頃にはメールを入れても返信が無くなった。入院後は陳氏を通じて連絡をしていた。

未だその時点では被告のことを信じていた。

（５）原告が平成18年５月末退院した際被告にメールをいれた後、原告の友人から、被告が「**噂を流したのは原告だ**。」と言い、更に驚くことに「**原告から脅されている**」とまで言っている事を聞かされた。

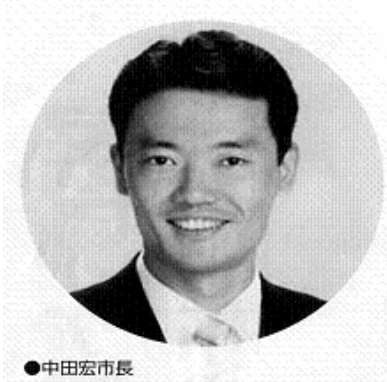
ここで被告の真意が分かり、もはや信じることができないと確信した。

▽主筆の目

華鈴灯に頻繁に出入りする中田宏市長を右翼団体（華鈴灯の前に事務所があり、写真の提供者）の幹部が目撃したことから事件は発覚し、各種の告発文書が市議や市幹部に配布され、不倫関係が表面化した。

市長は『事実無根』『結末を見て……』『ホントならベイブリッジで逆立ちできます』等、愚民（市民）に大言壮語した。

裁判が進行中で、真相（中田宏の死命を制す）は暴露しないが、判決に関係なく公開（中田宏が進退の表明時）する時期は何時か？。**乞うご期待。**



●中田宏市長

●報道された関内のクラブ